「世界驚かした江戸の絵本」

単純な線で本質描く蕙斎の「略画式」をフランスで復刻出版

クリストフ・マルケ

省略したごく単純な線で人や動物をユーモラスに描く。日本でそうした絵といえば、漫画の起源とされる平安時代の『鳥獣人物戯画』が思い浮かぶだろう。江戸期なら葛飾北斎の『北斎漫画』も有名だ。

〈北斎漫画より20年前に〉

復刻版の本と表紙

しかし『北斎漫画』が世に出る20年前、18世紀の終わりに「略画式」と呼ばれる傑作を出版した絵師がいたことは、あまり知られていない。鍬形蕙斎(1764-1824)、別名北尾政美である。

日本美術史の研究者として、蕙斎を調べるほどそれまで見たこともない作風に惹き付けられた。ジャポニズム（日本趣味）が隆盛を誇っていた19世紀後半から20世紀初頭にかけてのフランスで、蕙斎がいかに人気があったかも分かってきた。

昨年フランスで「略画式」の代表的な絵本『人物略画式』（1797年刊）と『鳥獣略画式』（1799年刊）を復刻出版したところ人気を集め40ユーロ（約4000円）という値段にもかかわらず、発行部数は4000に達した[1]。200年以上たった今でも、専門家だけでなく多くの人が蕙斎の絵に感動する。そのことをとても嬉しく思っている。復刻版のために使用した原本は、19世紀末にフランスに渡った本であり、個人コレクターの手を経て、現在はパリの国立美術研究所とフランス東部のナンシー市立美術館に保管されている。

学生時代に私は西洋美術史を勉強したが、それだけでは物足りず、日本の美術や文学も調べはじめた。日本に留学して、明治の洋画家・浅井忠や俳人・正岡子規が、江戸時代の絵本を通じて美術に親しんでいたことも知った。

関心が江戸の和本に移ると、フランスにも各地に和本の立派なコレクションがあることが分かってくる。ジャポニズム全盛時代の収集家、アーティストや画商が、浮世絵だけでなく和本も数多く集めていたのである。

木版摺りの和本は一冊一冊の出来が違う。なかにはフランスのものが天下の孤本であったり、世界中で一番状態がいいという例もあった。ただ、ほとんど研究する人もないまま死蔵されていたのが実情だった。

そうした「宝の山」を調査していくうちに、蕙斎の「略画式」に出会った。今まで見た浮世絵とはまったく次元の違う絵に驚き、何のためにこんな絵を描いたのか興味を持った。

[1] Christophe Marquet, *Dessins abrégés de Keisai. Oiseaux, animaux, personnages,* Paris, INHA, Arles, Editions Philippe Picquier, 2011.

〈ロダンも関心を示す〉

蕙斎は1764年に江戸日本橋の畳屋に生まれ、15歳で浮世絵師としてデビューした。後に、浮世絵師として

異例のことながら津山藩（現在の岡山県）の御抱絵師になったが、彼の真骨頂は絵本作家として描き上げた略画式であろう。

歌麿の美人画に代表される浮世絵が細かな技術を競ったのに対し、同時代の蕙斎は極端に単純化した線で人物や動物の本質を捉えた。動きのエッセンスが見事に写し出されている。子どもの絵のようにみえて難しい。

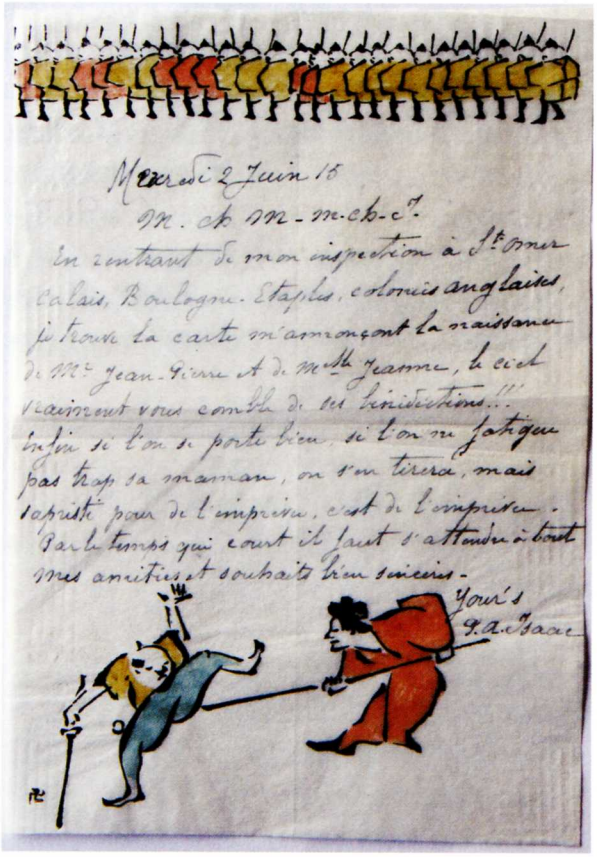
18世紀末の江戸の出版界は競争が激しかった。おそらく、独特の画風を作り上げたいと考えていた蕙斎の意志に加え、新しい絵本で世を驚かせたいという版元・須原屋市兵衛の意向も反映して「略画式」は誕生したのだろう。

ジャポニスムの時代のフランスでは、蕙斎は北斎の先駆者として美術の世界でしばしば話題になっていた。彫刻家のロダンも関心を持ち、「略画式」も持っていた。人の動きをどう絵にするかにも力を入れていたロダンは、ここまで省略できるという新たな可能性に衝撃を受けたに違いない。

もう一人、当時蕙斎に夢中になったのがアルフォンス・イザーク（1858-1924）というフランス人の木版画家だ。彼は蕙斎の『人物略画式』、『鳥獣略画式』、『魚介略画式』の版木を何らかの方法で手に入れ、パリの工房で試し摺りまでしていた。12部摺ったその本は製本しないまま友人や関係者に贈った。また、自分用の便箋や夕食会の招待状などに蕙斎の作品を図柄として摺り込むほどだったから、ほれ込みようがうかがえる。

実はこの版木の一部が昨年、パリでオークションに出された。今は日本に里帰りし、私も参加して実践女子大学文芸資料研究所で研究が進められている。その版木の一部が今回初めて展示されている。

イザークは1910年、ロンドンで開かれた日英博覧会に出向き、日本から来て浮世絵の実演をした元審美書院の版画職人の漆原由次郎（別名・木虫、1888-1953）に技術を学んで展示会や論文などによってフランスで紹介した。ここからは私の推測だが、イザークは彼を通じて蕙斎の版木を入手したのではないかと考えている。



『人物略画式』の板木を利用した便箋

〈古びることない楽しさ〉

手づくりの和本は、中身だけでなく本そのものがオブジェとして貴重だ。紙の感触、摺り、すべてが相まって江戸の出版文化、本の素晴らしさを今に伝えている。

残念ながらフランスでは木版摺りの和本のままつくり直すことはできない。復刻版は『人物略画式』、『鳥獣略画式』の2冊を表紙から奥付まで厚手の紙にほぼ原寸でオフセット印刷し、折り本に仕上げたのが工夫だ。印刷は北京にある凸版印刷のグループ会社に頼み、私が「18世紀のグラフィック革命」という題で解説を書いた。

蕙斎の絵が見ていて楽しいのは昔も今も変わらない。その楽しさは古びることなく、世界中だれにでも通じると確信している。

（平成24年7月3日『日本経済新聞』朝刊文化欄に掲載された記事に若干の加筆をしたものです。）